

フリークたちの城

空を飛ぶ夢を見ていた。

ゆるやかな坂道で自転車をこいでいたら、そのままだんだんに身体が浮き上がっていったのだ。あつという間に二十メートルほども上昇し、見下ろせば鎮守の森の深緑に、ぼつんと花咲いたような朱色の鳥居が、ペダルの足元を透かしてどんどん小さくなっていった。少し冷たい風に舞い上がる髪。わたしは軽快に車輪を回し続ける。

もっと高く。もっともつと高く。

やがて乗っている自転車が重く感じられ、わたしは何のためらいもなくサドルから腰を離すと、両腕を宙に泳がせた。わたしを離れた自転車がゆっくりと落下し始める。わたし自身は見えない糸で引き寄せられるように、空へと昇っていく。

もっと高く、もっともつと。

だが、うつすら透き通ったひつじ雲に頭から突っ込もうとしたそのとき、無遠慮に伝わってきた振動が、それまでの陶酔と高揚感を、修復不可能なほどに破壊してしまった。結果として、わたしは茶色い長椅子の端に座っている自分を発見したのだった。

さつと頭を上げ、人の気配がする右隣を見ると、

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

不愛想な低い声、それでも頬にはかすかに笑みを浮かべている。わたしは避けるように身を引きながら彼女を見つめた。濁りのない原色の赤に染めて、無造作に短く切った髪。シンプルな真紅のシャツに同色のジーンズ。化粧のない青白い顔の真ん中で半開きに歪んでいる真つ赤な唇。

思わず腰を浮かせ、わたしはおどおどあたりを見回した。

ぼんやりと暗い部屋だった。薄灰色のリノリウムを敷いた広い床に、白い壁と天井。中央にベンジャミンの大きな鉢が置かれている

ほかは、茶色いビニール張りの長椅子が二、三十ほども並び、ぎつしりと人が座っている。空いた席がないのか、柱や壁にもたれて立っている人もちらほらいた。見た感じは、大きな総合病院の待合室のようだ。だが、わからないのは、どうして、わたしがこんな見知らぬ場所で居眠りなぞしていたのか、ということだった。

「座るんなら座る、立つなら立つ、どっちかにしたら？」

振り返ると、赤い前髪を透かして、くりんと丸い瞳が人を小馬鹿にしたような表情を浮かべている。薄ら怖いような、腹が立つような気分になり、わたしは彼女との距離をできるだけ開けるよう苦心して、長椅子に座り直した。

再び部屋を見渡せば、前方には細長くくり抜かれた窓口があり、その左右には廊下が延びている。後方の壁半分にはガラス板がはめ込まれていた。ぐいと身体をひねってみると、その端には回転扉があった。わたしはほっとため息をついた。外からの光があんなに明るく見える。あれが出入り口なのに違いない。

出ていこうと立ち上がりかけたわたしの隣で、また声が出た。

「ああ、お腹がすいた。だけど今日のスープもまた鶏の血？ あれもさあ、たびたびだと気持ち悪いよね」

あくびをしながらこちらを見ている。

わたしの心臓がびくんと震え、二の腕が粟立った。

彼女から努めてゆっくりと視線をはずし、わたしは立ち上がった。全力で駆け出したくてたまらないのをこらえつつ、そつと歩きだす。ほんのわずかな注意も引きなくなかったので、回転ドアに向かう途中、そこにいる誰とも目を合わさなかった。

うつむいたままわたしは足を進めた、鈍く床に反射している明るさだけを頼りに一歩、二歩と。

……近づけばガラスごしに芝の緑とアスファルトが見えた。回転扉の重さを支えて鈍く光るステンレスの枠に手を伸ばす。ひやりと冷たい感触、力を込めてそれを押し、わたしはさつとドアのなかにすべりこんだ。

外に出てみると、日差しが妙にまぶしかった。正面に見えている門まで十五メートルあるなし。黒塗りの鉄柵をにらみながら、わたしは大またに歩いていった。

そう、たぶん、原因は事故なのだ。外出先で不慮の事故に遭い、脳震盪でも起こして倒れていたところを、この病院に搬送されたに違いない。でも、どこも痛くはないんだし、いったん家に帰ってから近くの病院へ行けばいい。なんだか知らないけれど、雑然としたロビーに気を失った人間を放置しているなんて、あんまりだ。あんな病院、とても信用ならない。とにかく早く帰らなくては、帰って……

間近で見るとひどく頑丈そうな正門のすぐ前まで来た。高い柵のうえには尖った針がいつぱい絡みついた鉄条網が取り付けられている。

これじゃあ、まるで……

開けて出ようと鉄柵に手をかけた瞬間、わたしはどきりと凍り付いてしまった。左右の扉が合わさった真ん中に、ぶら下がっているものが目に入ったのだ。

南京錠！

わたしの両手にあまるほど大きい。持ってみると意外に軽かったものの、それはかつちりと閉まっていた。

後ろを振り向き、今しがた出てきた建物と、その出入り口である回転扉を確認する。間違いない、あれが待合室なら、ここが正面玄関。だとすると、この南京錠がもつ意味は？

わたしはケージに入れられた犬のように、柵の隙間からうつろうつろと外を見た。

この建物の敷地に沿うように、二車線の道路が敷かれている。その向こうには青いフェンスで隔てられたレンガ色の線路と、ごちゃまじりした駅のプラットフォームが延びていた。誰かが道を通りかからないかと、しばらくじっと佇んでいたけれど、一台、二台の車が、声をかける間もなく、すいと通り過ぎただけだった。

プラットフォームには、すすけたオレンジ色の列車が来ては停車り、また発車した。そのたびに、乗り降りする乗客が少なくとも十数人はいた。

あれに乗って帰らなくちゃいけない。

わたしは唇を噛んだ。どこまでふざけた病院なんだろう。守衛も置かずに門を閉め切りにしているなんて。とにかく、あのロビーにあった受付で、ここの鍵を開けるように言わなくては。

足早にロビーまで引き返すと、わたしはアツと息を呑んだ。

誰もいないのだ。あれほど混雑していた部屋は、今やガランとからっぽ、整然と並んだ長椅子には人ひとりの姿もない。わたしが歩きだすにつれ、あたりにはその足音だけがコツンコツンと反響する。これはなんとしたことだろう？ 数十人はいたと思われる、あの人々はいつたいどこへ消えてしまったのか？ 窓口に近づくと、ぴたり閉じられたガラス戸には鍵がかけられ、その内側には白いカーテンが下がっていた。

わたしが正門で車道と駅を見つめながら佇んでいた時間は、ほんの十五分ほどだったと思う。行って戻ってくるまで、多くみても半時かかっていないはずだ。そのわずかな間に、みんな、どこへ行ってしまったというのだろう。

わたしは奥の廊下に向かってソロリと歩き出した。異様な静けさを乱す自分の靴音がやけに気になってしまい、自然と忍び足になる。なぜだか、自分がここにいることを誰にも知られたくないような気がしていた。知られてしまったら、もうこの建物から出られなくなるような、どこか暗いところに幽閉されて、もうお日様の光を見られなくなるような、そんな不安感に取り憑かれ、背筋がちりちりしていたのだった。

廊下はいっそう暗く、思いのほか長いので、建物の端がどうなっているのかも見通せない。天井にはずらりと蛍光灯が並んでいるが、なぜか一本も点灯していない。左右どちらに行こうかと迷って、左のほうへ足を踏み出したとたん、背後でジャーと短く水の流れる音がした。振り向くと、向こうの廊下の壁にはトイレを表す標識が小さく出っ張っている。音はそこから聞こえてきたように思えた。

誰かがいるのだ。誰もいなければいけないで不気味だし、誰かがいるとなれば、それはそれで緊張してしまう。わたしは息を詰めて、そっとトイレの出入り口を見ていた。ドアはなく、洞穴のように四角い闇がふたつあるだけだ。

その人は、男性用トイレの出入り口から姿を現した。スーツをきちんと着込んだ体格のいい男性だ。白いシャツにネクタイを結んでいるのがチラリと見えた。ハンカチで手を拭きながら、ゆったりし

た足取りで向こうへ歩いていく。わたしはその後ろ姿を追った。あの人に訊けば、何かわかるかもしれない。この建物のこと、あの南京錠のこと……

「あの、すいません、ちょっとお尋ねします」

小走りに追いつき声をかけると、彼は振り向いた。ウエーヴのかけた柔らかな髪を無造作に分け、濃い眉のしたでは銀縁のめがねをかけた瞳が愛想よく笑っている。年齢は恐らく四十前後だろう。柑橘系の軽い香りは、コロンか、アフターシェーヴローションか。

「なんですか」

穏やかなテノールの響きにつられて、わたしの頬が緩んだ。こここの正門が閉まっているのですが、と口にしかけたとき、こちらに向き直った男性の上着がずれて開いた。ボタンをとめていないのだ。首から胸に下がっている紺色のネクタイの下方にフラフラ揺れているものが目の端に飛び込んできたのと、わたしが何気なくそちらに視線を向けたのは、ほとんど同時だった。

はじめ、それが何なのか、わたしにはわからなかった。一瞬、日焼けして赤茶色になった獅子おどしの竹筒を連想する。が、斜め前に三十センチほども屹立して微妙に揺れているものが、男のスボンのチャックの割れ目からヌツと突き出ているのを認めるなり、わたしは両手で口元を押さえた。

まさか……！

わたしが驚くのを待っていたように、あははは、と軽やかな笑い声が響いた、またしても感じのいいテノールで。だが、わたしにはもう男の顔を見上げられない。動悸が止まらず口のなかから干からびた感じがし、震える両足が勝手に後ずさりを始める。

男の靴が少し動いたように見えたたん、わたしはキヤアともワアとも何とも言えない声をあげて逃げだした。廊下からロビーを横切って走り、回転ドアをくぐるときには、焦りのあまりステンレス棒でたたかいた顔に顔を打った。鼻先の痛みと恐怖に涙をにじませながら外へ飛び出すと、向こうからやってきた赤い塊を片手で強く押しのけた。

少しよろけた彼女が怒ったように言う、

「ちょっと、あなたなによ、人を突き飛ばしておいて！」

「いや！ 放してよ！ 放して！」

すごい力で片腕を掴まれたまま、わたしは身体をよじって叫んだ。
「あなた、鼻から血がでてるんじゃない？」

「え？」

赤づくめの少女は見覚えのある丸っこい目でこちらを見つめながら、片手を伸ばしてわたしの鼻と唇のあいだを人差し指で乱暴にこすった。

「ほら」と目の前に出された指先がわずかに赤く濡れている。「これ、本物の血？」

彼女は血のついた指をくくん嗅いだ。

「ツンと鉄っぽい匂いがある。どうやら絵の具じゃないみたいだね」
あたりまえでしょう、誰が絵の具なんか、と叫ぶわたしに、彼女の後ろでドアがぐるりと回転するのが見えた。

「キャアーツ！」

わたしは悲鳴をあげて顔を手で覆い、その場にうずくまってしまった。男の靴音が近づいてくる。頭のうえで、少女が気安く呼びかける声が聞こえた。

「あ、ペニーちゃん」

「あはは、久しぶり。その人、新しく入った人？」

その人とは、わたしのことに違いない。露出狂の変質者は、どうやらこのイカレタ少女と顔馴染みの様子だ。

「そうみたい。あたし、入ってくるところ、ちらっただけ見てたけど……」

「いや、すぐくびっくりしてくれてねえ。ほら、前に言ってただろ？ あれ、もつと大きくしたんだ。三十五センチの直径五センチ」

「長さが三十五センチ？」

「うん。ちよつとすごいだろ？ 今度の見回りではいけるかな？」

「まあ難しいと思うよ。あたし、ついこのあいだ、五十センチの人がいるって聞いたもん」

「へえ、五十センチだって？ 誰から聞いたの？」

「お花おばさんから」

「ふうん。でも、大きけりゃいいってもんでもないしな。まあ、対

策練つとこう。ええと、あの……」

男の手がわたしの肩に触れた。ギャツと叫んで身をかわした拍子に、わたしは地面にひっくり返ってしまった。こわごわ顔を上げると、さっきのイチモツは、もうズボンの中にしまいこんだ見え、そうしていれば、男もごくまっとうなビジネスマンのようだ。

「触らないで、変態！」

「ははは、いやあ、そんなに驚いてくれると嬉しいな。じゃ、あなたも頑張つて」

わたしと少女に片手を振ると、彼は口笛を吹きながら向こうへ歩いていった。正門には向かわず、建物の横手に広がる夾竹桃の茂みのほうへ。

男の後ろ姿が見えなくなると、わたしは立ち上がってスカートの後ろを手で払った。奇矯な出で立ちの少女は、振り返って腕組みをしている。こちらを横目でちらりと見ると、言った。

「あんなの見せられたくらいで、きゃあきゃあ。そんなに男の気を惹きたいわけ？」

辛辣なような、どことなく面白がっているような口調だった。

「気を惹きたい？ あなた、おかしいんじゃないの？ 普通はあんな訳のわからないことされたらびっくりするし、怖いじゃない」

「ペニーちゃんはいいい人だよ。あんたのほづが、よほどおかしいつて」

おかしな人におかしな人呼ばわりされるほど納得のいかないことはない。わたしが黙っていると、彼女は続けた。

「鼻血、止まっただみたいだね。でも、なんかそのままだとチヨビ髭か鼻毛みたいに見えるから、部屋で顔洗ったほづがいいんじゃない？」

ざらついた鼻の下を指先でそつと触りながら、わたしは大事なことを思い出していた。この種の病院の入院患者に、このような質問をしているものかと少し考えてから、幼い子に対するように、穏やかな丁寧さを装って訊いた。

「部屋つて……あなたの？ 有り難いけど、遠慮するわ。ね、それより正門が閉まつてて出られないんだけど、看護婦詰所かどこかに案内してもらえない？ わたし、帰らなくちゃいけないのよ。もう

日も傾いてきたし」

「は？ 看護婦詰所？ あんた……」

絶句すると、いきなり彼女は身体を折り曲げて大袈裟に笑いだした。いつまでもそうやって馬鹿笑いしているの、わたしはまた薄ら怖くなり、じっとその様子を見守っていたが、やがて少女が息をはずませながら口を開いた。

「ちょっと、ちょっとお、あんたって、マジな顔してヘンテコな冗談言うんだね」

「あの、わたしは……」

「もう帰るって、あんた、ゆうべはあんなに勇ましく入ってきたのにさ、たった一日でシッポ巻いて退散すんの、ええっ？ なあんだ、意外と根性ないんだね」

わたしはぎゅっと眉根を寄せた。ゆうべは？ ゆうべ……？

いつのまに吹いてきた風が、目の前の少女の短髪を逆立たせ、それが燃える炎のように見える。わたしが何か訊こうとするのを手で制して、炎の帽子を被った彼女は、落ち着いた声で言った。

「ごめん、言い過ぎたかな。とにかくあんたの部屋へ行こう」

わたしの部屋？

こちらの返事も待たず、すたすた歩き出してしまった彼女のあとについて、わたしは再び建物のなかに入ってしまった。

先ほど見た廊下のトイレを少しすぎると、階段とエレベータが並んでいた。

「エレベータは使っちゃ駄目。センセイたちに迷惑じゃん」

扉の前で立ち止まったわたしを、少女がきつく睨んだ。ボタンの表示を見るかぎり、この建物は十階建てのようだ。彼女は諭すように、

「ピックアップされてからじゃないと、どうせ二階からうえには上がれないんだし、階段使つのがあたりまえだよ」

言うやいなや、さっさと階段を昇り始めた。

二階の廊下の両側には、同じ幅をした狭いドアがずらっと続いている。ドアのうえには白いプラスチックのプレートがかけてあり、それぞれ植物や動物の絵、幾何学模様などが描かれている。ここの

人たちにとっては、無機的な番号よりも、具体的で意味のある絵や模様のほうが憶えやすいからなのか、などと妙なところで感心していたわたしは、ここだよ、という少女の声に振り返った。

そのドアには、とぐるを巻いた蛇の絵のついたプレートが掛けている。鍵はかかっていなかった。わたしたちは彼女を先頭に、その部屋に入った。

部屋の中は四畳くらい、小さな机にパイプ椅子、簡易ベッドが置いてあるだけだった。縦に細長い窓は開け放たれ、消毒薬の匂いはしないかわり、どこからかカビ臭さが漂ってくる。振り向けば、隅のほうに大きめのどんぶり碗くらいの洗面台と簡素な水道の蛇口がある。そのすぐうえの壁には丸い鏡が掛かっていた。

「そこで顔洗うといいよ。じゃ、あたしは『女郎蜘蛛』の部屋にいるから」

出ていこうとする彼女を、わたしは引き留めた。こんなところに置いていかれるなんて、それこそ冗談じゃない。

「ねえ、待って。ちょっと訊きたいことがあるんだけど」

「なによ？ あたしの名前は又エ。ここではね。あんたは？」

わたしは、と口を開きかけて、だがその先が出てこない。まさかそんなこと、あるわけがないと思うのだが、考えれば考えるほどわからない。名前、名前、わたしの名前は……

「ええっ？ どうしたの、わたし？ わたしの名前は？ ねえ、わたしの名前を知らない？」

わたしは思わず掴みかかるように彼女の肩を揺すった。必死だったのだ。赤い少女、又エが、丸い目をさらに見開いた。

「なんであたしが知ってるのよ？ あんた、ゆづべここに入ってきたばかりじゃん」

「それ、どういうことなの？ わたしがここへ来たって、いったいどこから？ どんなふうにな？」

勢い込んで訊ねるわたしを見つめ、彼女はブツと吹き出した。人差し指で耳の横あたりにクルクル円を描きながら言った。

「なに、ほんとに医者が必要なんじゃない？ そういえばすべて転んで頭打ったもんね、あのととき。あんた、自分にはこんなに大きな傷痕があるんだって叫びながら入ってきてさ、そんなの珍しくも

ない、傷のうちに入らないって誰かに笑われて、派手な揉み合いになったじゃん。そのときうつかり転倒して、床で頭打ったんだよ。

言っとくけど、あれはあんたも悪かったんだよ、いきなり怒ってタックルしていくんだもん。しばらく這いつくばって頭抱えてたけどさ、この部屋に連れてこられたときにはケロツとしてたじゃん」

知らない、知らない、わたしは何も知らないし、憶えていない。

「嘘！ そんなのあなたの作り話じゃないの？ わたしはちよつとした事故に遭って、運び込まれてきたのよ。頭を打ったショックで一時的な記憶喪失になってしまったんだわ。なんてことでしょう、自分の名前がわからないなんて…… ほんとうにこうしちゃいられない、帰らないと」

「どこへ帰るの？」

しばらく考えたあと、わたしは静かに睨り泣き始めた。

「……わからない、それも……」

長いためのきをつけていた又工は、何を思ったのか急にクスクス笑い出すと、景気良く両手をぽんと打った。そのまま天井を仰ぎ、わざとらしく芝居がかった抑揚をつけて言った。

「おお、ここはどこなの？ わたしはだあれ？ …… あはは、わかったよ、その路線でいくんだね？ 最近、多いんだよ、そういうの。競争率高いけど、まあ頑張りなよ」

「何の話？ ほんとにわからない」

「はいはい、わかったわかった。とりあえず、サイコさんって呼んでおくよ。あんたが自分で気に入った名前を思いつくまでね」

じゃ、と踵を返すなり、彼女はひらりと部屋の外へ飛び出していった。

わたしは彼女が去っていく足音を聞きながらドアを閉めた。白いシートと毛布のかかったベッドに腰掛ける。十本の指を髪のかなかに差し込み、そろりそろりと頭皮を押さえていくと、後頭部にずきんとこたえる場所があった。ここだ。頭を打ったのは間違いない。それからわたしは半ば放心状態で、とりとめのないことをグルグル考え続けた。

事故に遭ったのはゆづべのことかもしれない。頭を打ったからかいささか錯乱して記憶も定かでない状態のわたしが運び込まれてき

た。けれど、身元を証明できるようなものを身につけていなかった。だから、どこへ連絡もできず、一晩ここに入院させることにしたのだろうか。とはいっても、警察には連絡してあるだろうし、わたしの家族だって、わたしが何日も帰らなければ搜索願いを出すに決まっている。

わたしの家族。家族、家族……

家族という言葉に現実味が感じられず、どんな顔も声も思い出せなかった。もし、わたしが一人暮らしをしているのなら、誰が搜索願いを出してくれるのだろう。働いていれば、職場の人が無断欠勤が続くの心配するかもしれない。どこかの学校へ通う学生であれば、担当の先生やクラスメイトが、わたしの欠席を不審に思ってくれるかもしれない。

窓の外はもうはや日が落ちかかり、夕暮れどきに独特の、もの寂しい風が吹き込んでくる。わたしは立って窓を閉めた。こうなれば仕方がない、やがてやってくる食事の時間まで待とう。配膳係の人が何か知っているかもしれないし、そのうち医者の巡回もあるだろう。あの変態男が言っていたではないか、今度の見回りではどうのこうのと。そうだ、又エも確か、センセイは上階にいるというようなことを口走っていた。もしかしたら、この階は開放病棟だけれど、上のほうは閉鎖病棟なのかもしれない。だから、そこには医者や看護人もいて……あとで外からでも窓を見てみよう。鉄格子がはまっているかどうか。

わたしは白無地の壁紙が貼られた部屋を見回した。時計と呼べるものはどこにも掛かっていない。そして、小花柄の綿ブラウスと水色デニムのフレアスカートを着ているわたしは、ポケットに財布も入れていなければ、アクセサリーも時計も身につけていないのだった。また窓辺に立つと、門の向こうに見える線路を走る電車が規則正しく行き来するのを、わたしはいつまでも見つめていた。

突然、廊下が騒がしくなったのでドアを開けてみると、人々が次から次へと部屋から湧き出て、階段へと向かっている。何事かと思い、わたしはちょうど目の前を通りかかった五十がらみの女性に訊ねてみた。彼女は目尻に柔らかな皺を浮かべ、片えくぼをつくと、

「お食事の時間なのです。あなたは？ 食べないの？」
一緒に行こうと手招きされ、わたしは彼女とともに一階まで降りた。

すでに電灯がついているにもかかわらず薄暗いロビーには、昼下がりに見たのと同じ、大勢の人でごったがえしていた。窓口が開いていて、そこから差し出されるアルマイト製の碗を、列をつくった各々が手に取っては引き返していく。わたしと女性もその列に並んだ。イタリア料理を出す店のなかにも入ったよう、あたりには人の食欲を刺激するスパイスの芳香が満ちている。窓口の向こうで配膳しているのは、一様に白い上ツ張りを着た男女三人、忙しそうに立ち働いているので、何を話しかける暇もなかった。

手渡されたのは、茄子と鶏肉のトマト煮込みのように見える。傍らの女性にそう言つと、彼女は小首をかしげて、

「そうね、でも、また血のスープだよって言う人もいるわね」

口をすぼめてオホホと笑つと、ギョツと驚いた表情のまま固まっているわたしを見た。

「いやあね、あの赤い髪の娘さん。トマト料理が嫌いなんだわ、きつと。同じように赤いのにね、可笑しいわねえ、血は好きなのよねえ、ホホホ……」

わたしは一人笑いつている彼女からさりげなく離れ、ロビーから外に出た。もう彼女とは話していたくなかった。

ロビーの出入り口からわずかに離れ、地面に張られた芝のうえに腰を下ろして、わたしは支給された夕食を少しずつ口に運んだ。少し濃い味付けだが、温かくて美味しかった。三口ほど食べると、何の前触れもなく涙がこぼれてきた。

ああ、誰か、わたしの名前を教えて欲しい。帰るべき場所を教えてください。

たとえば、あのプラットフォームまで歩いて行けたとしても、わたしには、どこまでの切符を買えばいいのかもわからないのだ。わたしは苦い涙と一緒に、咀嚼していた鶏肉を呑みこんだ。

けつきよく、わたしはトマト煮込みを全部たいらげた。空になった碗をどうすればいいのかなどと思いつながら、うつすら汗ばんだ額

や涙のあとを片手でぬぐう。そして顔を上げると、正門の前で何か
が動いたような気がした。暗くてよくわからないが、道路に設置さ
れた街灯のぼんやりした明かりを受け、黒い人影が一体、鉄柵に寄
りかかるように立っている。その人は、どうやらこちらに背を向け
て、柵ごしに外をじっと見ているようだ。

わたしはアルマイルト碗を芝のうえに置きっぱなしにしたまま、そ
ちらへ近づいていった。この際、何かがわかるなら、誰に何を訊ね
たってかまわないではないか。

人影は、わたしの気配にゆっくりと振り返った。少なくなった白
髪を額から後ろへとなでつけた老人だ。ひよろりと痩せて、腰も少
し曲がりかけている。鉄柵にあずけた身体をわずかにひねってわた
しに目をむけ、白い眉を上げると、一瞬、猫のようにその瞳が光つ
た。それは異様な感じだったが、たぶん街灯が反射したのだろう。
わたしは、気難しげに引き結んだ彼の口元から目をそらして声をか
けた。

「あの。何を見ているんですか」

無言。ややあつて、意外としっかりした声が返ってきた。

「見えないと思っておるものじゃ」

「それは……」

「見てみい。あの駅を」

あごで示されたほうを見ると、プラットフォームには列車が停ま
っており、せわしなく乗り降りしている人々の姿が小さく見えた。

「あのなかの何人が、まっとうに目を使っておるかな？ ええっ？」

「さあ…… あの、わたし、ここから出たいんです。家に帰らない
と。どうすれば帰れますか？ ええと、誰に訊けば……」

「ふん、帰りたければ今すぐにもここから出ていくがよかるう。

誰も引き止めはせんわ」

さもくだらないことだと言わんばかりの口調に、わたしは強い反
感を覚えながら唇を尖らせた。

「でも、鍵が閉まっているじゃないですか。あの南京錠が見えませ
んか？」

「ほほう、あれで閉まっておると思うなら、出てはいけんな」

わたしは南京錠を手に取ると、腹立ちまぎれに力いっぱい押した

り引いたりした。夜の空気を裂くように、甲高い金属音がしばらく響き渡った。

「どう思おうが、閉まっていますよ、完全にね！」

老人はにやにやと口の端で笑って見ていたが、やがて垂れた瞼を唐突にカツと見開いた。またしても、その奥の瞳がきらりと光を放った。こめかみがヒクヒクと攣っている。怖くなつたわたしが、その場を立ち去ろうと背を向けたとき、とても老人とは思えぬ太い声がわたしを打った。

「おまえはホンモノか！ ニセモノか！」

明かりのともる建物めざして走り出したわたしの後ろから、老人の声が幾度も追いかけてくる。ホンモノか！ ニセモノか！

わたしはそのたびに足を速め、両手で耳を塞ぐと、自分の部屋まで息を切らせて駆け上がった。

翌朝、乱暴なノックの音が二、三度したかと思うと、こちらの返事も待たずに又エが部屋に入ってきた。

「おっと、まだ寝てたんだね」

固いマットのうえで、もぞもぞと身体を起こしながら、わたしは力なく言った。

「……誰も来なかった、誰も。ゆうべ、ずっと待ってたのに」

「誰も来なかった？ あのさ、言っとくけど、ここに夜這いの風習はないよ。約束でもしてたんなら別だけど。それとも、誰でもいいわけ？」

わたしは彼女を睨みつけた。今日もやっぱり赤いシャツとジーンズ。

「そんなこと言ってるんじゃないわ。医者も看護人も巡回に来ないの？ ここは？」

「これだからねえ。サイコさん、病人ごっこは必要なときだけにしなよ」

「今にわかるわ。警察だって動き始めるはずだもの」

はいはい、と彼女は軽く肩をすくめると、こちらに向かって真面目な表情をつくった。

「あんだ、ゆうべ、外の芝生のうえに食器を放り出したまま部屋に

戻ったでしょ。あんたと一緒にいたお花おばさんが片づけといてくれたんだよ。あの人、面倒見いいからさ。ひとこと、礼ぐらい言ったらどう。今さっき裏庭で見かけたよ。まだいるんじゃない?」

それだけ早口でまくしたけると彼女は、ああ忙しい忙しいとつぶやきながら、ドアも閉めずに出ていってしまった。

わたしはベッドから下りてカーテンを開けた。よく晴れた空には一片の雲もない。今日は上階へ行つて、医師の誰かに話をしてみるつもりだった。どうやら適切な治療を受けることなく放置されているらしい開放病棟の患者たちに対する責任を問い、わたし自身の身元について何らかの情報を得るためだ。けれども、わたしは少し考えを変えた。先にこの裏庭とやらを見てみよう。いま、下手に騒ぐと閉鎖病棟に入れられてしまう恐れもあるではないか。そうなら、と思っただけで身震いがでた。まずは偵察だ。それから始めよう。

外に出ると、正門がぴったり閉まっているのを見届け、わたしは昨日の変態男が歩き去っていった夾竹桃の茂みへと向かった。明るい朝に見ると、並んだ緑を透かして有刺鉄線がとりつけられた灰色の高い塀が見えた。わたしはチツと舌打ちした。いまましい思いがこみ上げてくる。

茂みの間の細い小道を抜けて建物の裏手に出ると、ふっさりと青芝の張られた庭が広がっていた。なかほどに水の枯れた噴水があつて、ベンチがいくつが無秩序に置かれている。そのうえでは人が座つたり寝ころんだりしていた。右手には藤棚があり、風にそよぐ伸びやかな葉の一枚一枚が、日差しを跳ね返してきらきら光っていた。庭の奥は、高低さまざまな木々が生い茂り、ちよつとした雑木林になつている。例の塀は建物をぐるりと取り囲んで、その先は林のなかへと消えていた。わたしの胸がとくんと高鳴った。もしかしたら、あの雑木林のなかには塀の途切れた場所があるのではないか。あまり知られていない古い裏門か何か?

わたしは藤棚の下まで歩いた。丸太を半分に割つたベンチのうえに、昨夜の女性が腰掛けて何か読んでいる。声をかけると、彼女は老眼鏡をずらしながら顔を上げた。

「こんにちは。いいお天気ですね」

彼女はまた片えくぼをつくって笑うと、隣に座るよう手で促した。わたしはスカートを広げて座りながら言った。

「ゆうべはすみませんでした、食器を外に置きっぱなしにしたりして。これから気をつけます」

「あら、いいですよ、そんなこと。そういう人、よくいるんだし。たいしたことじゃないわ」

彼女の膝に目をやれば、活字も何もない白いページの本に、押し花や押し葉がたくさん貼りつけられている。パンジー、桜草、四つ葉のクローバー、モミジの葉……

「この花とか、ぜんぶ自分で押したんですか？」

訊くと、彼女は華奢なめがねのつるをつまんで微笑んだ。

「そうよ。花や葉、ひとつひとつに物語があるの。それをこつやつて読んでいると楽しくてね、時間も忘れるわ」

「詩的ですね」

「あら、詩じゃありません。これは、物語」

継ぐべき言葉が思いつかず、わたしは何気なしにまた雑木林の方向を見た。

「あそこは駄目よ」

振り向くと、お花おばさんがまっすぐにわたしを見据えていた。

老眼鏡のレンズの後ろで、その目が牛の目のように大きくなった。

「あそこには、行っちゃ駄目。絶対に駄目」

「なぜですか？」

高い塀の途切れた場所があるからですか、乗り越えられそうな裏門があるからですか、と訊きたい衝動を、わたしはかろうじて抑えた。

「出てこられなくなるからです。諦めちゃった人が引つ張るから。外でも生きられないし、中でも生きられない、そんなふうに絶望した人たちが、あそこで首を吊ったのですよ、何人も。あの薄暗い木の間に入っていくとね、その人たちにつかまって、もう出てこられなくなるの」

「わたしはここから出たいんですけど。どうやったら外に出られませんか」

「おもてに門があるでしょ。あそこから出ていけるわよ」

「でも、ずっと閉まってるじゃないですか」

「おかしいわねえ、閉まってる?」

微笑みながら、彼女は小首をかしげている。

「あそこは、誰も通れませんか」

「おかしいわねえ、あなた、よく見てごらんさないな」

それきりそのことには関心もなさそうな様子で、押し花に目を落としてしまった彼女のそばを離れ、わたしはまた歩き出した。ぶらぶらとゆっくり庭を回って、ときおり林のほうへも顔を向けたが、お花おばさんが藤棚の下から、それとなくわたしを見張っているように、そこへ入っていくことはできなかった。

とりあえずロビーまで帰ろうと、建物脇の夾竹桃の茂みに近づいたわたしの耳に、なにやら人が争うような物音が聞こえてきた。と思うと、男の興奮した唸り声。

この女、許せねえ、今こそオマエのことを後悔させてやる! 若い男女の争いに違いない。これは大変なことになりそうだ。せつば詰まった男の声に殺意じみたものを感じて、わたしは茂みの小道を急いだ。

芝生のうえでは、奇妙なダンスが繰り広げられていた。

まだ二十歳ぐらいかと思しき青年が、右手に握りしめた長いバタフライナイフを、陽光にかざしては振り下ろしている。四方八方の何も無い空間に、突き立てては引っこ抜きしているのだ。女の姿など、どこにも見えない。たぶん、上手く逃げられたのだろう。それにしては、先ほどの声とはうらはらに、青年の表情には怒りの真剣さなどみじんも感じられない。わたしは半ばあつけにとられ、半ば薄気味悪くなり、早足で彼の横を通り過ぎようとした。

青年がやおらダンスを止めた。わたしとすれ違いざまに言った。

「あの一、どう思います?」

振り向いたものの、何を訊かれたのかわからず黙っていると、

「人間に斬りつけるときって、どういう角度から刃を当てにいくと思います? こうかな? それとも、こんなふう?」

わたしは反射的に両手で身体をかばった。

「ちよっと! それを振り回すのはやめて! 危ないじゃない!」

「ああ、すみませんでした」

はにかんだように笑うと白い八重歯が目立つ。すらりと長い手足にツヤのある清潔な髪。見ようによっては好青年だ。

「どんなふうに斬りつけるかだなんて……知らないわよ、そんなこと。いくら痴話喧嘩したからって、普通の人ならナイフを出してきたりはしないでしょからね」

「そうかな？ 若者の凶悪犯罪は多くなってますよ。キレやすいっていうのかな？」

まるで人ごとだ。さつき自分が誰かを罵っていた言葉の激しさなど、すっかり忘れている。それにしても、こんな青年に刃物を持たせておくなんて、本当にここはどうかしている。どきどきするような尖ったナイフの先から、わたしは目を離せなくなった。手のひらがジツトリ汗ばんでくる。

「そう。でも、とにかく、そんなナイフはしまっておいたほうがいいんじゃない？」

「なぜですか？」

「人を傷つけようとすると、誤って自分を傷つけてしまうからよ。痛い思いは嫌でしょう？」

「僕なら大丈夫ですよ、慣れていきますからね」

クスリと笑った頬には髭剃り跡もなくつるんとしていて、長い睫毛が女の子のように優しげだ。この青年のどこからあのような唸り声が出てくるのだろう……

青年の顔を見つめていると、建物のなかからいきなり、ジリジリジリジリと火災警報装置の鳴る音がした。はっと振り向けば、人々がもつロビーからわらわらと外に出てきている。皆、慌てたり動揺している感じはないが、芝のうえに立ったまま建物を見上げている。

「火事？」

瞬間、わたしは小躍りしたいような気持ちになった。どうということもないボヤであれ、もっと大きな出火であれ、ともかく火事ならば消防車やパトカーが来るではないか。そのときこそあの正門が開くはず！

わたしは門の前へと駆けだした。道路が混んでいなければ、すぐにも到着するだろう。けたたましいサイレンの音が近づいてくる

のを今か今かと待ちながら、わたしは黒い柵にしがみついていた。しばらくすると、一心に外を見ているわたしの後ろで、人々がどつと歓声をあげるのが聞こえた。火がよいよ大きくなったのだろうか？ さつと建物のほうを向けば、立っている人々の背中が、ひとかたまりの集団をつくっている。隣り合った者同士でさかんに喋っていたり、笑いながら拍手をしている者もいる。妙だな、と首をかしげたとたん、気がついた。予期せぬ事故につきものの緊張感がないのだ、誰にも。火の手はたいしたこともなく、備え付けの消火器が何かですぐ消し止められたのだろうか。だから、サイレンの音もいまだに聞こえてこないのだろうか……

ふくらむだけふくらんだ期待がシルシル萎んでいった。わたしはなんとなく、皆が注目しているらしい建物の上部を見上げた。どの窓にも鉄格子などなかった。十階のちょうど真ん中から少し左によつた窓が全開になっている。煙も炎も出てはいない、わたしの部屋の窓に比べれば、七、八倍はありそうな広い窓だった。よく見れば、二階には蜂の巣のように小さな無数の窓が並んでいるというのに、三階、四階と上階になるにつれ、窓は広く、天井も高くなっている。あれが一部屋の窓ならば、十階には五、六室しかない見当だ。個室でなく、大部屋なのだろうか。

顔を上げたまま、わたしはふらふらと人垣へ足を踏み出した。そのときふいに、開いた窓のなかにうごめいているモノを発見して、思わず棒立ちになった。

……あれはいつたい？

化け物としか思えなかった。

あれは、人らしきかたちをしてはいるが、首の付け根から頭が二つ生えていた。ひとつは丸禿の男、ひとつは長い髪の女、それぞれの顔が青と赤に塗り分けられている。白いノースリーブの服を着た肩からは何本もの腕が生えており、一対の腕だけが胸の前で組まれ、その他の多くは肩からでてばらばらな方向に伸びている。その一本一本の手首から先は、まるで熱帯地方で見る民族舞踊のように、クネクネひらひらと動いている。しいて言えば双頭の千手観音というところだが、そう呼ぶには、あまりにもおぞましく、グロテスクな姿だった。

その生き物が窓辺から身を乗り出すと、周囲でまたワツと歓声が起こった。指笛を鳴らす者もいる。

「ふうー。すごいですね、相変わらず」

さっきの青年が、いつのまにか、わたしのそばまで寄ってきていた。あのナイフはと見れば、もつどこかへしまつたらしい。

「あれはなんなの？」

「ああいうのが、あのセンセイらしいところですよ」

「ええっ？ センセイって、あなたたち、あれをセンセイと呼んでいるの？ あれは化け物じゃないの！」

青年はクツクと喉の奥で笑い声を立てると、

「そうですね、まあ、化け物です。だから、みんな好きなんですよ、ほら」

彼はついと半身をひねった。すらりとした指のさす方角を視線で追い、わたしは驚きの声をあげた。ここからでは小さくしか見えないが、ずっと向こうのプラットフォームで列車を待っている人たちの何人かが、黒いものを目に当ててこちらを見ているのだ。やがて列車が来ると、その乗客のなかにも、同じように黒いものを目に当てている人々がいた。

「あの人たちが持つてるのは、双眼鏡？」

青年は答えずに、また窓の化け物をふり仰ぐと、

「僕もいつかはあの部屋に行くんだ。眺めのいい、あの広い部屋に」
夢見るようにつぶやく。わたしは齒の間から空気を押し出すように呻いた。

「こんな、こんなことが、あつていいと言つての？ 人を……見せ物にして！」

あとは言葉にならなかつた。両手で頭を抱えているわたしを、青年が不思議そうに見つめた。

「あなたも、そのつもりでここに来たんでしょう？」

それだけ言つと、長い脚で大またに立ち去ってしまった。唇を噛みしめて、その後ろ姿を睨んでいると、ぼそりと聞き覚えのある声がした。

「どうせニセモノじゃ」

すぐ隣に、ゆうべ門の前で出会った老人が立っていた。だが今日

は、背を丸めて大きな杖にすがり、ずいぶん弱々しく老けこんで見えた。老人は、駅の人々を見やりながら、また言った。聞こえるか聞こえないかの小声で。

「ぜんぶニセモノなんじゃ」

夕食の後、わたしは裏庭のベンチに腰掛けて、どこか禍々しいほどに明るい満月を眺めていた。夕方、ロビーに誰もいないのを見計らってエレベータに乗ってみたが、けっきょく、これといった成果は何もなかったのだ。

狭い箱に入って十階のボタンを押すと、カタカタと小刻みに音を立てながら上階へと昇っていく。振動が止まると、チン、と音がして扉が開くのを待った。扉が左右に分かれ始め、いざ出ようとしたわたしは、思わぬ障壁に阻まれた。

なんと、扉が二重になっているのだ。内側のクリーム色に塗装された扉は開いたけれど、その外で十階の廊下とわたしを隔てている銀色の扉は開かなかった。取っ手や押しボタンの見あたらない、つるりとしたステンレスの表面には、険しい表情のわたしが鈍く映っているだけだ。一歩下がってよく見ると、ちょうどわたしの額のうえあたりの位置に、小さな黒いガラス板が詰め込まれている。わたしはそこに自分の顔を映してみたり、両手の指先をぜんぶ押しつけてみたりした。が、ドアはぴくりとも動かず、時間切れなのか、内側の扉がまた閉じてしまった。

降下し始めたエレベータは、六階で止まった。再び扉が開く。その向こうには、やはりもう一枚の扉。だが、こんどはそれが開いた。そして、背の高い男がひとり、乗り込んできた。彼とすれ違って外へ出ることはできなかった。入ってきた男が、黒いセルフレームのめがねごしに、わたしをじっと見ていたからだ、まるで不法侵入者を咎めるような目で。

男はグレイのシャツを着て、そのうえに白衣をはおっていた。手には分厚いバインダーを持っている。彼が四階のボタンを押すと、わたしはあるだけの勇気を振り絞って声をかけた。

「ここの先生ですか？ わたしは二階の部屋に入っている者ですが」
男は肩を揺ると、さも面倒そうに口を開いた。

「私は先生じゃないです、ただのお使い。あ、私に何か頼まれても、ご期待には添えないですよ。忙しくてすることがたまっているし、いちいち例外をつくっていたら、きりがない。女だからといって甘えが通用する世の中でもありませんしね」

なんとという言い草をする看護人だろう。腹が立つたけれど、ここで我慢しなければチャンスを棒に振ってしまう。

「あなたが先生じゃないなら、先生に会わせてください。直接、話があったいんです。わたしは自分のことが知りたいんです。いくら病状が軽く見えても、こんなふうが好き勝手をさせて放置しておくところがどこにあるでしょう。せめて定期的に巡回して、カウンセリングなりなんなりを……」

チン、と音がして、四階に着いた。男はこちらを見ることもせず、「なにをおっしゃっているのか、私にはさっぱりですが、こういうことに使う時間とエネルギーを今度の見回りでぶつけられたらいかがですかね」

言つと、ステンレスの扉に取り付けられた四角いガラス板に自分の指先を軽く当てた。扉は音もなくスルリと開いた。やはり、指紋で識別しているのだ。

二階まで降りた箱の扉が開くと、すぐそこには見慣れてしまった廊下がある。わたしはエレベータから出て、すぐごと自室に引き上げるしかなかった……

ベンチに腰掛けたまま、わたしはまた背をそらして頭上の月を眺める。

真ん丸い、銀の盆。そういえば、ずっと昔、お月様と少女が話している絵本を見たことがある。絨毯のうえに座って、綺麗に色づけされた挿し絵に見とれていた。あのお話のなかで、お月様は少女に何を語っていたのだろうか？

突然、わたしは正面に向き直り、両手のひらで顔をはさんだ。

ああ、憶えている、憶えている！

小豆色の地に白い椿の花が散った絨毯、淡い水彩の絵本、そつだ、あれは寒い日で、わたしは青いニットのワンピースを着て、厚手の白いタイツを穿いていた。

憶えている。そんな冬の日が、わたしの幼いころ、確かにあった

のだ。そして母がわたしの名を呼んで、わたしはハイと返事をし
て……だから、わたしの名前は、名前は……

肝心なことが思い出せない。いくら頑張っても、頼りない記憶の
網は、そこでぶつんと途切れていた。がっかりしたけれど、希望も
見えてきた。何かのきっかけがあれば、ぜんぶ思い出せるかもしれ
ない。そう、近いうちに。月から飛び出してきた絵本の思い出は、
その前兆だ。

わたしは建物に穿たれた無数の窓に灯る明かりに目を向けた。な
かは異常な世界、常識の通じない世界、けれどもここからこうやっ
て、カーテンごしに漏れる柔らかな光だけを見ているぶんには、な
んて平和なんだろう。

と、二、三人の話し声が後ろから近づいてきた。誰もいないと思
っていた裏庭だが、わたし以外にも人がいたらしい。ここに来てベ
ンチに座ったとき、あたりをよく見たのだが、どうも彼らの存在を
見落としていたようだ。こんなに明るいついというのに。

わたしは座ったまま、上半身だけで彼らのほうを向いた。

「こんばんは。あなたたちが庭にいたなんて、知らなかったわ」

芝を踏む音を立てながら、又エが低くささやいた。

「あたしにはあんたがここにいるのが見えてたよ。あの雑木林から
ね」

「ええっ、あの林のなかにいたの？」

わたしは、そこにいるスーツ姿の変態男と、もうひとりの仲間ら
しい見知らぬ女の子に、素早く視線を移した。

「いや、なかには入ってない。ほんの入り口にいただけ」

「あそこには入っちゃ駄目だって、お花おばさんが……」

変態男が、あっははと笑う。よく通るテノールが響いた。

「あれだろう、ほら、引つ張られるから出てこれなくなるってヤ
ツだろ？」

わたしがうなずくと、三人が可笑しそうに顔を見合わせた。又エ
が言う。

「あんなの本気にしてんの？ 何も出てきやしないよ」

「じゃあ、首を吊った人が何人もいるっていうのは嘘なのね？」

「いや、それはほんと。あたし、前にちよっと奥まで入りかけて、

木の枝に白骨がひっかかってんを見たことあるもん。だけど、それくらいだよ」

「それくらいって、それだけでもじゅうぶん怖いじゃない！」

「まったく、なんでも怖がるんだね、このサイコさんは。白骨なんかより怖いのは、生きてる人間だよ」

また変態男が、あははと声をたてて笑った。隣でにこにこしていた女の子が、じゃ、わたしはこれで、と礼儀正しく皆に目礼した。

彼女が歩き出すと同時に変態男が呼び止めた、僕も部屋に帰るから一緒に行こう。言いながら、彼は女の子を追いかけた。

並んで歩く二人が、まもなく夾竹桃の小道に姿を消すと、又エがわたしの隣に座りながら、赤い口の端をニツと持ち上げた。

「ペニーちゃんとおの子、最近いい感じなんだ。あたし、なんだかお邪魔だったみたいだよ」

「……楽しみを見つucker人は、どんな環境でもそれを見つuckerられるのね」

「それ、どういう意味？」

「いや、なんでもない」

又エはわたしの皮肉に気づかないようだ。

「ああ、そうそう。今日のセンセイのパフォーマンス、あんたも見たんじゃ？」

「あのお化けの見せ物のこと？ それなら見たわ」

「どう思った？」

わたしは口ごもった。

「どうって。……気持ちが悪いただけだった」

ぱつと瞳を開くと、又エがわたしの鼻のあたりを指差して叫んだ。「やっぱりあんたも？ さっきの二人とも話してたんだけどね、やつぱ、もうああいうのって、終わってるよね」

彼女は一人で納得するかのようにつづけた。

「そうかそうか、ここに入ってきたばかりのあんたまでそう思うんだから、きつとみんな、もう内心では飽きちゃってるんだ。あのセンセイも、そろそろ余生だね。あの部屋、誰かに明け渡さなくちゃ。いずれあたしにも回ってくるといいな」

わたしは、くつくつ笑っている彼女に訊ねた。

「あの部屋に何か特別なことでもあるの？ あそこに移ると、見せ物にならなきゃいけないの？」

「あんた、なんのためにここに入ってきたのさ？ みんな、あの眺めのいい場所を目指してるんじゃない。みんなから特別扱いされたんじゃない。そのために、ない知恵絞って頑張ってるんじゃない」「わからないわ、あなたの言ってること」

「そんな無欲なふりしちゃって。いいけどね、べつに。でも、あたしは戦う。欲しいものは戦って勝ち取るのが、あたしの流儀だから」わたしは、また噛み合わなくなってきた会話にそっとためいきをついた。話題を変えようと、彼女の髪を見た。

「その髪も服も、真っ赤っかにしてるのは、あなたの趣味？」

「趣味でもあり、決意表明でもあるね」

「決意表明？」

「うん。人生つてさ、なにもかも不平等じゃない。生まれてきたときから。だから、あたしは自分の運命に反抗してやるって決めたんだ。赤は反抗と戦いの色なんだよ」

「ずいぶん好戦的な性格なのね」

「それから、赤は血の色。心に流す血の色。普通は見えないようにするよね？ でも、あたしはわざとこうやって見せて回っているわけ。これもひとつの反抗なんだ、あたし流の」

正直なところ、この少女の内側にどんな妄想や激情が渦巻いているのか、わたしにはよくわからなかった。理解しようとも思わなかった。ただそのとき、なんとなくぼうつとした悲しさを感じていた。それは、もしかしたら、彼女に対するものだったかもしれないし、あるいは自分と自分の置かれた立場に対するものだったのかもしれない、閉ざされた輪のなかにおいて、周囲と通じ合う言葉を持たないわたしに対する。

わたしはまた思い出す、幼い日、ワンピースからほのかに立ち上る樟脳とワールの匂い、椿散る絨毯、淡い水彩で描かれた月……

「いつまでここにいますもり？」

ふいに訊かれ、わたしは顔を上げた。

「いつまでって……」

「もう遅いよ。寝ないの？ あたしは、部屋に戻ってまだすること

があるから」

立ち上がると、又工はまた芝を踏んで歩き出した。世間から孤立してそびえる、大きな建物のほうへ。

翌日のパフォーマーは、ベルが鳴ると八階の一番左端の窓から、その奇怪な姿を現した。

豊富な肉体を持った大女で、垂れ気味の巨大な乳房から小山のように張り出した臀部まで、一糸まとわぬその裸身には、くまなく金粉が塗りたくられていた。ゆったりと踊りながら後ろを向き、長い髪を振り乱すように頭を振ると、後頭部全体をほぼ縦に割ったように、ぱっくりと赤黒い穴が開いている。それは、閉じたり開いたりし、なかには白い歯までがはえている。異様に犬歯の発達した女の口そのものだった。

目を細めて門の向こうを見ると、駅で電車待ちをする人々のなかには、やっぱり双眼鏡を目に当てている人が何人かいた。この建物と、気ちがいじみたパフォーマースと、それをあれこれ批評しながら見守る群衆。彼らのレンズにはどのように映って見えるのだろうか？ そして、ひとり離れたところで逆方向を向いて、彼らのレンズを柵のこちら側から見つめているわたしのことは？

芝のうえに座り込んでいるわたしのところへお花おばさんがやってきた。片手にはやっぱり、押し花のつまった本を抱えている。

「どう？ すごいじゃない」

「なにがですか？」

彼女は目尻にいっぱい皺を寄せて楽しげに笑った。

「あの脱ぎっぷり。豪快よねえ。八階の人たちも、なかなかたいしたものだわねえ」

「……………」ご自分も脱いでみたらいかがですか」

うんざりした声になるのが自分でもわかったが、どうにもできなかった。だが、お花おばさんはオッホホホと首をのけぞらせて、

「わたくしなどが裸になっても、しょせんはダシの出きつたトリガラみたいなものだわよ。ああいうのは肉体に恵まれた人でなければ、ねえ？ あなたもどうかしら？ もう少し太るか鍛えるかしないと、無理っばいわね」

「わたしはこのままで結構です。べつに上階の部屋に住みたいなんて、思ってませんから。いい眺めや特別待遇と引き替えに、自分を晒し者にはしたくないですから」

お花おばさんは、少し声をひそめると、

「わたくしも確かに、ああいうのはどうかと思うところもあります。それにねえ、階を昇っていくような野心はもうないわ、この歳になつて」

「……このまえ、外に出たいならいつでもあの門から出られるって言いましたね？」

「ええ。それがなにか」

「じゃあ、あなたはどつしていつもここに閉じこもっているんですか？ 外が恋しくないんですか？ それともときどきは外に出てるんですか？」

彼女は門のほうを見た。そこから遠くを見るような眼差しで微笑んだ。

「ずっとここにいるのは、それが楽しいからよ。わたくしの若い頃は、ここへ入るのは憧れだったのです。やっと好きなことができるようになったって、まさに今が、わたくしの青春なの」

「よかったですね」

そう言うしかなかった。お花おばさんは、よっこいしょと立ち上がりながらわたしを見た。さりげなく言った。

「今度の見回りには参加するの？」

「見回りって？ よくわからないんですけど」

「上の階を管理している人たちが降りてきて、わたくしたちを見てくれるのよ」

「ええっ、それ、いつですか？」

見回りなんていうものだから、てっきり防犯関係のことかと思っていた。少し首をかしげて考える様子をしながら、彼女は言った。

「明日だったかしら、あさってだったかしら？ とにかく午後にはロビーにたくさん人が集まるから、それでわかると思うわ。いつもと違って、みなさんやっぱりピリピリした雰囲気だし。参加するのだったら、それなりの準備をしないかね」

黙っているわたしの肩を、お花おばさんは軽くばんばんと二度叩

いた。

「若いのだもの。何度だって挑戦していいのよ。わたくしのように、いつまでも狭い部屋に甘んじることはないわ」

部屋がどこであるかは、わたしには関係のないことだ。だが、この扉の外に出る機会がついに巡って来るということではないか？

思い切って、彼らに訴えてみよう。わたしはただ記憶を失っただけで、あとはまったく正常な思考能力を持っているんだし、こんなところはずっと閉じこめられている謂われは何もないのだと。

明日か、あさってか……

わたしは巨大な建物を見あげた。八階のパフォーマンスはまだ続いている。なんと醜悪なことだろう。わたしは座ったまま力をこめて芝草を引きちぎった。あれは職員や関係者の娯楽だ。そうに違いない。恐らくは自意識も定かでない者を、あのように下品な見せ物にして面白がっているのだ。

青い匂いがついた手で、わたしはドンと大地を叩いた。何度も腕を振り回し頬を紅潮させて喋り続ける群衆のうち、誰ひとりとして、わたしの怒りに気づく者はない。しばらくすると、揺るがぬ地面に打ちつけていた手のひらが、じんと痛んできた。

その夜、わたしはロビーで又エと一緒にシチューを食べた。煮すぎてふやけた野菜と、パサパサしてすっかり旨味の抜けてしまった肉は、安っぽいレトルト食品のような感じがした。

わたしは顔をしかめながら、トロリとした液体をスプーンですくった。

「これ、なんだか工場でつくったようなシチューじゃない？」

こともなげに又エが言う。

「うん、これはきつとそうだよ。缶詰だね。いつも、トラックが来て初めの二日だけだよ、美味しいのは。そんなときはここでつくるから。でも、三日も経つとこうなっちゃう」

突如、あることが脳裏にひらめき、わたしは手にしていたアルマイト碗を取り落としそうになった。そうだ、なぜそこに思い至らなかったんだらう。すぐ考えつきそうなものなのに！ まったく、大馬鹿者だ、わたしは！

身内にわき起る興奮を隠して、わたしは又エに訊いてみた。

「ねえ、この食事って、どこでつくってるの?」

「この地下に大きな食品貯蔵室と調理場があるって聞いたよ」

「食材はどうしてるの? 自給自足じゃないでしょう?」

彼女は笑った。

「まさか。ああ、ほら、一部の人が庭の隅をほじくり返して、ちっちゃな菜園つくってるじゃん? けど、あれはあの人たちの趣味だから。まともに食べられるようなモノが育ってんの見たことないし。食材はさ、定期的に仕入れてるんじゃない?」

「どうやって?」

「どうやって? でっかいトラックが朝早く来るんだよ、あたしたちがまだ寝てるような時間に」

「えっ、それは毎日?」

又エが首を振る。赤い前髪が眉のうえで揺れた。

「ううん。たぶん、五、六日おきぐらいじゃない? いや、正確には知らないけど。二日ほど前に、鶏肉の煮込んだやつが出たじゃん? あたしの大嫌いなトマト使った料理。あの日の朝は来たんじゃないかな? 茄子がまだ新鮮だったもん」

瞬時に、わたしは簡単な計算をしていた。

「じゃあ、あさつての朝、もしかしたらトラックが来るかもしれないのね?」

「または、その次の朝だね」

そうなのだ。こんな大人数の食事を賄っているということは、どこかの給食業者が出入りしているに決まっているではないか。彼らはトラックでやって来る。裏口がないのだから、あの正門を開けてもうひとつ、確かめておくべきことがあった。

「ねえ、あなた、今度の見回りはどうするの?」

カツンカツンとスプーンで碗の底をすくっていた又エが顔を上げた。

「あたしはエントリーしない。あたしにとって、まだそういう時期じゃないと思うんだ。だから、今回は見るだけにしとく。でも、ペニちゃんはそのかも知れないって言ってるし、他にもたくさんいるよ、きつと。なに、サイコさん、エントリー考えてんの?」

わたしは慌てて否定した。

「いいえ、わたしはそんなつもりないわよ」

「だろうね。ここにきて間もないから、準備する時間なんかなかったでしょ？ まあ、用意周到な人は、外からも準備万端ととのえて入って来たりするんだけど、そんな人は稀だよ」

「で、いつなの、見回りの日って？」

「なんだ、そんなことも知らなかったんだ。あさつての午後五時からだよ。ちよつと遅れるかも知れないけどね」

「そう、あさつてなの……」

すべてはその日に決まるとのことだ。

早朝、トラックが来て正門から出られるなら、それにこしたことはないし、夕方の見回りでは何がどうなるかわからないけれど、一か八か、賭けてみる価値はある。とにかく、このままこうしていても、なにひとつ変わらないのだから。

翌日は、昼前から雨が降り始めた。

わたしは朝まで夜通し起きていた。前の晩、食事をしたあと部屋でひとり考えてみるに、又エにもはつきりとしたことはわかっていないのだから、ひよつとして、その日の夜明けに食材配達トラックが来るかもしれないと思ったのだ。

皆が寝静まって、しんとしている建物のなか、眠くて瞼が下がってくるのをこらえながら、狭い部屋でストレッチ体操を試みたり、顔を洗ったりして目を覚ましていた。が、そんな努力も、夜の明ける最初の兆候が東の空に現れ始めたら、もうしなくてもよくなつた。もしかしたら、という期待感で、自然と頭は冴え、眠気など吹き飛んでしまったからだ。

窓辺でじつと外を見ていたわたしは、ゆっくりノブを回してドアを開け、暗い廊下に出ると、靴音を忍ばせて階段からロビーに降りる。そして、鍵のかかっていない玄関を開けると、黒い鉄柵の門に向かつて走り出した。

目立たぬよう正門の脇に座りこみ、わたしは外を眺めた。早起きの年寄りが散歩などしていないだろうかと、あたりの物音に気を配りながら。べつに、ここに座っていることを、誰に見られたっていい

いはずなのに、ほんの少しの邪魔や妨害もされたくなくて、わたしはいささか過敏になっていた。

空は、いちめんの雲で覆われていたけれど、東から徐々に明るさが増していった。

来るだろうか？ それとも、やはり明日？ あさって？

向こうに見える駅にはポツポツと人影が現れ、周囲の静けさに遠慮するように一番列車が、ゴトンゴトンとスピードを落としてやってくる。それから、二番目の列車が。そして三番目の列車が……

列車が線路を行き交いするたび、乗り降りする人の数も増えた。ラッシュ時にはプラットフォームに人が溢れ、そこに停まる列車のなかも満員状態になった。

あの人たちは、きつと今から職場へ向かうのだろう。悲喜こもこもの、あるいは単調な今日をやり過ごすため、すすけたオレンジ色の箱に乗り、互いにぎゅうぎゅうと押し合いながら。

わたしはこの場所から何重にも隔てられたその光景に、胸が痛くなった。

あの列車に乗りたい。わたしも、また、あの列車に乗っていたい。素知らぬ他人の顔をしながらも、肩と肩、背中と背中、腕と腕を密着させ、押しつけ合い、ドアが開くごとにドツと吐き出され、また吸い込まれて。

あたりがすっかり明るくなった頃には、いつも通りに閉まった門と、その前に座るわたしだけが取り残されていた。立ち上がると、脚に痺れがきた。手でお尻を払うと、スカートの後ろがしつとりと芝の水気を含んでいた。いつまでも未練たらしくそこに佇んでいるわたしの頬を、ぽつりと冷たいものが掠って落ちた。わたしは建物に向かってのろのろと引き返した。銀灰色の空から、細い糸を引くような水滴が、次々に落ちてきた。

眠っていたわたしが目を覚ましたのは、お昼をとうに回った頃らしい。なにしろ時計がないのでわからないのだ。部屋にも時計がない、廊下にもない、ロビーにもない。他の人は自前の腕時計なりと持っているのだろうか？ わたしはちょっと思い起こしてみた。お花おばさんは、確かもっていなかった。又エが手首に通しているの

は、赤いビーズのブレスレットだけだ。変態男は、いつも長袖のス
ーツ姿だからわからない。あの老人や青年については、そこまでよ
く見ていなかった。

お昼を食べ損ねたので、きつとお腹が空くだろうと思っていたら、
窓際の小さな机のうえに、ラップで包んだサンドウィッチと紙パツ
クのジュースが置いてあった。そのしたには、小さなメモ用紙をち
ぎったものが敷かれている。

▲声をかけても起きないから、ここに置いていくよ

赤鉛筆の乱雑な走り書きは、又エのものだ。ああ見えて、彼女は
意外と人の世話を焼きたがる場所があった。

わたしは机の前に腰掛けて、ぱさついたパンにゆで卵とレタスの
切れ端を挟んだものを、生ぬるい林檎ジュースで呑み下した。目の
前の窓ガラスには無数の雨粒が、ぶつかっては流れ落ち、ぶつかっ
てはまた流れ落ちて、幾筋もの縦線を描いていた。食べ終わると
わたしは、ぼんやりそれを眺めながら、又エには夕食で会ったとき
礼を言っておこうと考えていた。

ベルが鳴らないと、静かなものだ。みんな、何をしているのだろ
う？ 明日の見回りとやらのために、準備をしているのだろうか？

いまさら、どうでもよかった。わたしはただ、明日の夕方、

ららら話ができねば、それでいいのだから。しかし、見回らといつ
ても、そんな時間があるだろうか？ そんなことが許される雰囲気
なのだろうか？

もう悩んでも仕方がない。そのときその場で判断し、わたしにで
きることをやるだけだ。もしも上階の閉鎖病棟へ強制的に移されそ
うになったら、思いっきり暴れて逃げ出そう。裏庭の、あの雑木林
のなかへ。どれだけ奥行きがあるのか知らないが、人が死に場所に
選ぶのだから、容易に見つからないだけの広さはあるのだろう。

ちようど暗くなってくるときだし、夜になれば追っ手も諦めるだろ
う。塀もあるのだから。わたしはあそこで一夜を過ごし……そう、
白骨と一緒に……早朝になったら、食材配達のトラックと入れ違い
に逃げ出そう。

……もつ出てこられなくなるの……諦めちゃった人が引つ張るか
ら……

お花おばさんの話を思い出して、わたしはゾツと身震いした。

ああ、嫌だ、嫌だ。こんな最悪のシナリオにはなりませんように。明日の朝、正門の前でまた待っていて、もしもトラックが来てくれれば、それで一挙解決、万々歳ではないか。どうか、そうなりますように。

滅入ってくる気分を振り払うように、大きく伸びをすると、わたしはまた窓ガラスに流れる水滴を見つめた。

あめ、あめ、ふれ、ふれ、かあさんが
ジャノメでおむかえ、うれしいな
ピチピチチャプチャプ、らんらんらん

ふと、口をついて出た。

これは昔々の童謡。ジャノメ、の意味がわからなかった。車の名前でもなさそうだ。雨の日にバイクや自転車で迎えにも行かないだろうし。それとも、昔は行ったのだろうか。

一番の歌詞はうる覚え。

あらあら、あのこは、ずぶぬれだ
やなぎのねかたで、ないている
ピチピチチャプチャプ、らんらんらん

わたしは唇の端で笑った。なんて残酷な子供なのだろう。自分には母親が迎えに来てくれるとわかっていて、ずぶ濡れになった子を見て優越感にひたっているのか。それとも、この童謡には三番の歌詞があつて、そこでは泣いている子に何か親切をしてやるのだろうか。そうかもしれない、このままではあんまりだ。でも、わたしは、この歌はここまでしか知らない。

ふうと息を吐いて目を閉じる。どこか遠く聞こえていた雨だれの音が、急に大きくなった。と、黒い瞼の裏に人影がぼんやり浮かんだ。

……約束してね……

潮のようにひたひたと満ちていた午後の気怠さが、さっと引いて

いった。

わたしの声！ わたしのセリフだ！

約束してね、わたしはそう言った、誰かに。雨のなかで。

顔を上げ宙に視線を固定し、わたしはまた記憶のスクリーンに見入った。だが、そこには雨が降っているということ、それなのに傘をさしていないということ、そして、あのひとこと「約束してね」。それ以外の景色も音も、みなぼやけている。降り始めた細かい雨が髪や肩を次第に濡らす、ときおり吹く風に混じるひんやりと湿った匂い、一步離れた人物に向かってわたしは懇願する、約束してね、と。

相手の顔はわからない、いくら瞳を凝らしても、その部分には暗い穴が開いている。が、それは男だ。間違いなく。そして、なによりもはつきりした真実として感じられるのは、わたしの願いが決して叶わなかった、わたしにとっては切なる約束が、守られはしなかった、ということだ。

水に落ちた粘土のように身体が重くなった。なぜ、こんな中途半端なかたちで思い出すのだろう。意味ありげなワンシーン。その底に澱んでいる混沌。すくい取って明るい日に当て、もっと子細に見てみたい。だが、実のところ、たいした出来事ではないのかもしれない。

わたしは机のうえで丸まったラップとジュースの紙パックに目を落とした。半分に切られた林檎の絵柄は、印刷が少しぶれている。わたしは思う、断片的に顔を見せるわたしの記憶は、果たして過去の事実の一部なのだろうか。それとも、わたしがたまに見る妙に現実感のある夢みたいなものなのだろうか。

線と色がずれた林檎の絵。事実と記憶がずれたわたしの頭。いま、また足元にうち寄せてくるのは、小さなごみ混じりの倦怠。わたしはいささか投げやりに椅子から立ち上がった。ベッドに横たわると、再び目を閉じた。

夜更けに雨はやんだ。徹夜二日目の空は、きれいに晴れて、地平線間際を除くと雲ひとつなかった。今朝も来なかった食材配達の下ラック。明日はきつと来るだろう。悪いほうにばかり想像がふくら

んでいくけれど、まだこれで何が決まったわけでもない。そうそう自分の期待したとおりには物事は運ばない、というだけだ。

わたしは眠気を我慢して昼まで起きていた。ロビーで昼食を受け取り、その場で食べると、部屋に戻るなりベッドに倒れ込んだ。

裸足のまま往来を歩き、恥ずかしさでいっぱいになりながら、なくした靴を探し回るといふ、まともな筋書きも何もない夢の途中で、はっと飛び起きた。窓のカーテンを開けると、昼下がりの太陽が、ずいぶん西に傾いていた。忍び寄る夕闇の気配。

もう始まっているのではないかと、わたしは急いで部屋を出た。階段を下りると、ロビーには人が二十人ほど集まって少しざわついている。カーテンの下がった窓口の前に長テーブルが置かれ、白衣を着た五人の男女が座っていた。見たところ、それぞれ四十代から六十代くらい。

テーブルの脇には、分厚いバインダーを抱えた背の高い男が立っている。いつかエレベータに乗ったときに見た男だったが、今日は白衣を着ていない。彼は神妙な顔つきをして、長テーブルの端に座った中年女性にヒソヒソと話しかけている。何を言っているのかは聞きとれない。彼が口を動かすたびに、大きな目を半眼にした女性は鷹揚にうなずいていた。

ロビーの端に立っていると、突然、腕を引っ張られた。振り向くと、又エが後ろで唇に人差し指を当てている。

「シツ。さつきみんなが集まったところだから。こっちで見学させてもらおうよ。」

鋭くささやくと、わたしの腕を引っ張った。わたしたちは、白衣の五人と向かい合って、ひとかたまりに座っている人々の端に、並んで座った。

前を向いて薄笑いを浮かべている又エに、わたしは小声で訊いた。「いったい何が始まるの?」

「あたしだって、そんなの知らない。見ていればわかるよ。」

「終わったら、あの人たちと話ができる?」

「話なんてできるわけじゃないじゃん。一応、選考の過程は、一般には漏れないことになってんだから。」

「いや、そうじゃなくて……。」

「こんな妙ちくりんな集会はどうでもいい、
　　^彼らと話した、
　　なのだと言おうとして、わたしはアツと声をたてた。

「シッ！　大きな声だしちゃ駄目だって」

わたしは、芝のうえでバタフライナイフを振り回していた青年が、
　　^彼らに呼び出され、ひとり前に進み出ていくのを見たのだった。
　　今日は少しゆったりしたジャケットを着て、やや背中を丸めた感じ
　　に見えるが、間違いなくあの青年だ。不穏なことに、彼の手には、
　　あのとぎのものより、もっと大型のナイフが握られている。よく磨
　　かれているのか、こんな薄暗い部屋でもキラキラ光っている。

まさか、あの人たちに襲いかかるつもりで……

皆が注視するなか、青年は右手で大型ナイフをふりかざし、ヤア
　　ツと奇声を発した。と思うと、ナイフがもう振り下ろされていた、
　　彼の左手めがけて。

何かが彼のジャケットの袖口から飛び出していった。それは、こ
　　ろん、ころん、と床に落ちて転がった。点々と赤いものを飛び散ら
　　せながら。わたしは、そのモノをはっきりと見るなり、思わず立ち
　　上がった。あれは手首だ！　あろうことが彼は、自分の手首から先
　　を切り落としたのだ！

目を見開き、喉から絞り出せるだけ大きな悲鳴をあげたわたしの
　　目の前で、青年がまた素早くナイフを動かす。今度は、首から派手
　　に血が噴き出した。彼の頭がごとりと落ち、目を剥いたままの白い
　　顔が、黒い後頭部と交代になりながら、ごろごろとこちらに転がっ
　　てきた。

叫び続け、その場に立ちすくんでいるわたしの口を、背後から又
　　エが両手で荒っぽくふさいだ。

「うるさいってば！　静かにしなよ！」

恐ろしい成り行きに我を忘れていたわたしは、息ができなくなっ
　　てもがいた。又エの手を懸命にふりほどきながら助けを求めて周囲
　　を見ると、皆、伸び上がってあたりを見回したり、こそこそと喋っ
　　たりしているが、誰も取り乱してはいない。白衣の五人は相変わら
　　ずの無表情で、回転が止まり静止した血まみれの生首を見ていた。

「なかなかよく出来てるじゃない」

言いながら又エがわたしを放すと、さっと腰を曲げ、足元から首

を持ち上げた。首の根元を支えている彼女の指のあいだから、どろりとした赤い血が滴った。

「ほら」

又エが笑って振り向くと、わたしにその首を押しつけた。

「やめて！」

また悲鳴をあげ、わたしは両腕を突っ張ると力任せに彼女を押しした。どこをどう突き飛ばしたのか、又エはふらついてしりもちをつき、その拍子に彼女の頭もまた、首からもげ落ちてしまった。と、見えたのだが、彼女はすぐに肩まで届く黒髪を振り乱しながら立ち上がると、

「もう！ あなた、なんてことすんのよ！ これに髪をぜんぶ押し込めるの、けっこう大変なんだから！」

手には真っ赤な毛の塊を持っている。彼女は手早く髪をまとめると、赤い毛を丁寧に広げて帽子のように被り始めた。

……カツラ？

わたしは悪態をつきながら赤毛のカツラと格闘している又エから視線を外すと、彼女がまた床に放り出した青年の首に目を向けた。

二、三人がそこにおいて、首を触ったりつついたりしている。

「ちよつとすいません」

彼らのなかに強引に割り込むと、わたしはかがみこんで目の前の生首をよく見た。手を伸ばして触れてみる。ゴムボールのような弾力を指先に感じた。首の切り口には小さな管が仕掛けてあり、そこから半ば固まりかけたゼリー状の血糊が流れ出している。目や鼻、口元は、青年に似せてあるが、それでも一見して全く別の顔だった。別人どころか、これは人間の首ではない。

オモチャの生首。

カツカツと近寄ってきた靴音に振り返ると、ナイフをしまった青年が微笑みながら立っていた。ジャケットには血がついていても、その爽やかな笑顔は、まったくの無傷だ。左手には、さっき切り落とした手首を掲げている。この距離で見れば、明らかに、それもまたプラスチックか何かでできた模型だった。腕を伸ばしてさっと生首を拾い上げると、青年はロビーから出ていった。

彼の後ろ姿が見えなくなると、わたしはロビーを見渡した。非難

がましい目、面白がっているような目が、わたしを取り囲んでいる。居並ぶ人々の顔がにやにやと引き歪んで、豚や蜥蜴やいろんな生き物の頭とだぶって見えた。わたしはじりじりと後ずさりする。異常だ！ この人たちは異常だ！

ツクリモノの赤い髪、ツクリモノの手首、ツクリモノの生首……そのとき、ある奇妙な考えがふと身内をよぎった。わたしは自分の思いつきに衝撃を受け、やにわに走り出した。ロビーを飛び出すと、まっすぐ正門に向かって駆けていった。

正門では、鉄柵にもたれながら、また老人が外を眺めていた。

わたしは、まず南京錠を手に取ると、丹念に調べ始めた。何のおかしな点もない、どこにでもある普通のシンプルな南京錠に思えた。あちこち引っ張ってみたり押してみたりしたが、錠が外れることはなかった。

おかしい、そんなはずはない。

南京錠を放り出すと、わたしはさらに鉄柵を調べにかかった。柵の一本一本を触ってみる。

「ちよつとどいてください」

言っと、邪険に老人を柵から引き離れた。だが、そうやって触ってみても、叩いてみても、指先にはどれも同じような冷たい金属の感触が返ってくるだけだ。

おかしい、おかしい、そうつぶやきながら、わたしは柵を強く握りしめた。と、何かが軋んだ。キツ。

柵の一本を右に左にひねってみる。キツ。軋む音がする。何度かやっている、柵の棒がネジのように回ることに気づいた。

興奮がわたしの体内をどくどくと巡り始めた。さらにゆっくり回していくと、ある角度で、棒を持つ手にカチリとかすかな響きを感じ取れた。そのままぐつと手前に引くと、棒はまたキツと軋みながら、柵の棒から外れた。わたしは存外に重い鉄の棒を芝生に投げた。それからまた隣の棒も同じように回してみる。これも簡単に外れた。その隣も。

どうやら柵の棒すべてが、そういう設計になっているらしい。手で回すと棒から外れる棒。三本も外すと、人ひとりがラクラク通れ

るスペースができていた。

わたしはポカンと口を開けたまま、柵の一部にできた穴を見つめていた。次第に、強烈な可笑しさがこみあげてくる。堪えきれなくなり、わたしは誰はばかることもなく、げらげら笑いだした。身体を折り曲げ、息を切らせながら、しゃくりあげるように笑った。

やはりフェイクだ！　ここでは何もかもがフェイクなのだ！

医者でもないのに白衣の人々、センセイとは名ばかりの化け物たち、閉じられたように見せかけた門、転がるオモチャの生首、すばんと脱げた真紅のカツラ……

みんな、みんな、ニセモノだ！

ごうつと音がして、満員電車が向こうのプラットホームに停まった。夕方のラッシュアワーに、慌ただしく乗り降りする人々の姿が見える。笑いの発作が収まったわたしは、穴のこちら側に立ったまま、その光景を見ていた。そして何もかもはつきりと思い出した、わたしがここに来た日のことを。

「行きなければ、行くがよからう。誰も止めはせん」

後ろを向くと、芝のうえに投げ捨てられた鉄棒のそばに、老人がしゃがみこんでいた。わたしは静かに言った。

「誰が止めなくても、わたしは行きません。わたしには、帰るべきところなんてないんですもの」

そうだ、あの約束が破られたそのときから、あちらの世界とわたしを結ぶ細い細い銀の糸は、ふつつりと切れてしまった。この門を出れば、わたしはきつと妄念の残滓となって、空中に霧散してしまっただろう。あの駅にたどり着く前に。わたしのこの姿も意識も、みな消えてなくなってしまうだろう。

人は何かに囚われていなければ、もはやまともなカタチすら保つていられなくなるものなのか。だから、わたしはここに来たのだった、自らこの場所に囚われ、そのことによって、生きつつけるにふさわしいカタチを得るために。

わたしは外に背を向けると、白くそびえる建物を仰いだ。夕陽に赤く染まる外壁のなかに、わたし同様、他には行き場のない異形の者たちを抱え込んだ建物を。

「ぜんぶニセモノなんじゃ」

老人が呻いた。わたしはもう聞いていなかった。聞く必要がなかった。

わたしはしばらくまた柵の穴から外を見ていた。つぎつぎに列車が来ては停まり、大勢の乗客を吐き出し、また吸い込んで発車する。沈みかけた太陽は、逆光でも目に優しくかった。

やがてわたしは、ゆっくりと建物へ引き返し始めた。柵を元通りにしておこうと鉄棒を置いた芝のうえを見れば、三本の棒の横に、小さく縮んだ老人の身体が転がっている。起こそうと思って腕を伸ばすと、彼がすでに灰色の石像になっていることがわかった。わたしは、老人をそのままそこに放置して、また歩き出した。

なんとなく頭がむず痒いので手をやってみると、なにかヌルツと動くものに触れた。足元から前へと長く延びた影に目を落とせば、わたしの頭部では、細長いものが何本も、うねうねと身を縮めたり伸ばしたりしている。じつとその影絵を見つめるわたしの視界をさえぎるように、一匹の黒い蛇が、額のすぐうえから、だらりと垂れてきた。わたしはそれを頭上へ振り払うと、再び顔を上げた。

蒼さが増してきた空には、壊れそうなほど薄い月がかかっている。わたしは思い出す、あの絵本のなかで、お月様が少女に言っていたのは、いつも幸せとともにあるよう祈っていなさい、確かそんなことだったな、と。